

Adonis Frangeskou, *Levinas, Kant and the Problematic of Temporality*, London: Palgrave macmillan, 2017.

著者アドニス・フランゲスク氏は、英国スタッフォードシャー大学で大陸哲学の博士号を取得後、現在西イングランド大学の客員講師を務めている。本書は同氏のはじめての著作である。

本書の目的は、カントの図式論を媒介として、いかにしてレヴィナスの議論がハイデガーの時間論を乗り越えているか示すことにある。この目的のために本書は以下の構成をとる。まず先行研究に対する本書の独自性を訴え（第1章）、次にハイデガーの『カントと形而上学の問題』におけるカント図式論の解釈を考察し（第2・3章）、さらにレヴィナスの時間論を「隔時性」の概念を中心に解釈し（第4・5章）、最後に再びカントの図式論に戻り、レヴィナスの議論がカント図式論の再解釈たりうることを示し、ハイデガーの解釈をレヴィナスが乗り越えているという結論に至る（第6章）。

先行研究に対する本書の独自な点として、レヴィナスとカントの関係性を論じるにあたって『純粹理性批判』、とくにその図式論をテーマにしていることがあげられる。実際、これまでの研究では、『実践理性批判』を介して両者の関係性を論じるものが多かった。こうした着眼点の独自性だけでなく、本書の議論は、英米圏を中心に多くの先行研究を瞥見しつつ、原典に寄り添って手堅く展開されていることも、その意義を高めているように思われる。

しかし、著者の理論の体系的な合理性は認められるものの、レヴィナスの解釈・解説面で具体的な現象の考察が欠けており、議論自体にこうした現象からの裏付けが希薄である。とはいえ、本書はカントの理論哲学とレヴィナスの時間論を結びつける研究として意義ある書といえるだろう。

(高野浩之)